

館林キリスト教会 デボーションノート（2007年）

1月 1日 今日の通読箇所 詩篇 23篇

「神様は私の羊飼い」

イギリスの有名な説教家スポルジョンは、この詩篇 23 篇を「詩篇の真珠」と呼びました。この詩篇にはそれほど素晴らしい神様への信頼が歌われているのです。この詩篇が歌われたパレスチナの地方は、決して豊かな牧草地ではありません。ですからどんな羊飼いに飼われるかは、羊にとって天と地との違いをもたらすのです。同じように私たちが何を頼り、誰を信じて生きているかによって、人生は天と地ほどに違ってきます。人生は山あり谷ありです。そのような人生で、「主は私の牧者であって私には乏しいことがない」と言えることは何と幸いでしょう。

1月 2日 今日の通読箇所 ヨシュア記 9：1～15

1月 3日 今日の通読箇所 ヨシュア記 9：16～27

ヨシュア記 9章

ギベオン人でもだれでも、人をあざむくのはよくないし、あざむかれるのも感心しない。しかしギベオン人が、カナン人でありながら、亡びをまぬかれて生きのびたのには、それなりの理由がある。第1に「神と神の民に対する抵抗は無益であること」、第2に「神と神の民は約束を非常に大切にすること」この2つをよく知って、そこに自分たちの救いの道を見出したのである。

1月 4日 今日の通読箇所 ヨシュア記 10：1～15

1月 5日 今日の通読箇所 ヨシュア記 10：16～27

1月 6日 今日の通読箇所 ヨシュア記 10：28～43

ヨシュア記 10章

ギベオンと他の3つの町の降伏によって、イスラエル軍は、中央に打ちこんだくさびのようにパレスチナを南北に分断した。おどろいた南部の諸王は、急に

力を合わせて戦ったが、イスラエルの勝利に終り南部は大體平定したのである。しかしこの勝利も、神の奇跡の助けによるのである。我々の生活も伝道の奉仕も、多くは戦いであるが、いつも主の勝利を信じて進みたい。

1月 7日 今日の通読箇所 ヨシュア記 11 : 1 ~ 15

1月 8日 今日の通読箇所 ヨシュア記 11 : 16 ~ 23

ヨシュア記 11章

今度は北方の大軍がメロムに集結してイスラエルと戦う事になったが、これにも勝って、イスラエルは、ようやくアブラハム以来の約束の地を領有するに至った。これは今の北ガラリヤからゴラン高原の地方で、現在のイスラエルにとっても、独立戦争、6日戦争等の勝利の記念の地である。この勝利には神の約束祝福と共に、人々の決死果敢な努力があった。これは昔も今も、また我々の戦争においても、同じく必要なことだ。

1月 9日 今日の通読箇所 ヨシュア記 13 : 1 ~ 14

ヨシュア記 13章 1 ~ 14

12章は占領地の表、およびそれらの地を今まで領有していて、イスラエルに敗北した緒王の表である。さて戦争も一段落した形であるが、13章では、神はなお完全な占領のために前進すべきことを改めてヨシュアに命じられた。軽快に進行した自転車も、停止すれば倒れる。人間も成長が止まった段階で、同時に、厳密な意味の老化がはじまるようだ。クリスチャン個人も教会も同じで、前進に健康維持の秘訣がある。

1月10日 今日の通読箇所 ヨシュア記 14 : 1 ~ 15

ヨシュア記 14章 1 ~ 15

イスラエルの人達が不信仰のむくいで荒野に死に絶えた中に、ヨシュアとカレブと二人が生き残り老人ながら元気で、みごとにカナンに入ったその理由がここに記してある。今やヨシュアはモーセの後継者として、全イスラエルを指導している。それにくらべてカレブは、言わばヒラの族長であるがそんな事に頓着なく信仰にみたされ、老いてなおかくしゃくとして陣頭に立つ姿は、本当に立派と言わざるを得ない。

1月11日 今日の通読箇所 ヨシュア記15：13～19

ヨシュア記 15章13～19

イスラエル全体が結束して戦争をする段階は一応終わったが、各部族がそれぞれ分配を受けた領地の中になお残っている、いわゆる残敵を平定する小規模な戦争は各部族の責任であった。カレブの場合その領内の平定戦争において、弟のオテニエル、その妻となったカレブの娘アクサなど、家族の活躍もめざましく、いわゆる「勇将のもとに弱卒なし」の感が深い。オテニエルはやがて第一の士師となる人物である。

1月12日 今日の通読箇所 ヨシュア記17：7～18

ヨシュア記 17章7～18

ヨセフの子孫、すなわちマナセとエフライム両氏族は、旧約を通じて、いつも「苦情をいう民」という印象をあたえる。ここでも「人数の多い割には領地がせまい。また平定しなければならぬ残敵もとても手ごわい」とヨシュアに苦情を言った。これに対してヨシュアは、彼らに「完全占領、完全開拓」をうながしている。彼らは人数の多い点を活かして、限られた土地でも、もっと有効に、もっと豊かにすることが出来るはずだった。

1月13日 今日の通読箇所 ヨシュア記18：1～10

ヨシュア記 18章1～10

以下占領地分配の記事が続くが、これは長くこの国の土地台帳ともなり、地理の教科書ともなった。イスラエル独特の、支族と地名、家系と領地の切りはなせない結びつきはここから始まる。貧しくなって土地を売るような事があっても、土地は五十年目のヨベルには無条件でもとの家族に返される。戸籍しらべの時には、必ず先祖の土地に帰って登録する、というような伝統は、こういう歴史を見てはじめて理解できると言えよう。

1月14日 今日の通読箇所 ヨシュア記20：1～9

ヨシュア記 20章1～9

「のがれの町」とその規定は、民数記35章等ですでに命じられていたが、今その通りに設置された。誤って人を殺した者は、この町に入ることによって、当時の警察法とも言うべき、近親者の復しゅうをのがれることができた。勿論故意の殺人者は「のがれの町」からも放逐され、その保護はうけられない。実は「ノアの箱舟」や「のがれの町」も、それぞれやがて全うされる、キリストの完全な救いを予告するのである。

1月15日 今日的通読箇所 ヨシュア記21:1~19

ヨシュア記 21章1~19

神殿で神様のご用に専念するレビ人は所領を受けなかった。今全部族の領地配分が終わった段階で、ただ居住するための町々を割り当ててもらった。何回も読んで来たように、彼らは人々の献げもので生活するはずだったからである。レビ人の町にあるものは、同時に「のがれの町」であった。祭司はその町で罪人の裁きと、ゆるしの責任者となった。ここにも、われらの裁き主そして救い主なる、キリストの予表がある。

1月16日 今日的通読箇所 ヨシュア記22:1~9

ヨシュア記 22章1~9

自分勝手はやりやすく、義務に従うことはむずかしい。ここにマナセ、ルベンの人々は、先に占領のすんだヨルダン川の東の地方の領有を、その希望通り許されていた。しかし彼らの中の青壮年者たちは、まだそこに安住せず、剣をとってヨルダンの西に渡り、常に先頭を切って戦い、同胞に対する義務を果たした。今や戦争に勝ち、全イスラエルの領地配分が完了したので、自分らの領地に帰りようやくその経営に着手することになったのである。

1月17日 今日的通読箇所 ヨシュア記23:1~13

ヨシュア記 23章1~13

モーセから引きついだ大事業（約束の地カナンの侵入と領有）を一応なしとげたヨシュアは、今つくづく老いを感じ、死期の迫るのを知り（2・14節）二回にわたって人々を集め、遺言的訓辞をあたえた。一つの問題は、カナンの人々の生き残りに対する、イスラエル人の油断であって「彼らを全滅させよ」との主の命令に対する服従の不徹底であった。ヨシュアはこれを心配してくりかえしいましめたのである。

1月18日 今日的通読箇所 ヨシュア記24:1~16

ヨシュア記 24章1~16

今まで受けてきた神の恵みを回顧して感謝し、これからも神に従ってゆく決意をあらたにすることは、大切なことである。自分の死の近きを悟ったヨシュアの遺戒もまたこれにつきる。さてヨシュアは、自分の死後、果たしてイスラエルの人々が、神に対する忠誠を守ってゆくかどうか多くの不安を抱いていた。それ故「自分と家族は最後まで主に仕える」と特に強調した。信仰とは最終的には「神と我」の関係に帰着するからである。

1月19日 今日の通読箇所 マタイによる福音書21：1～11

「エルサレム入城」

この福音書の著者マタイは、旧約聖書の預言を引用し、イエス様のエルサレム入城の様子を記している。イエス様がエルサレム付近のベテパゲに来た時、弟子たちをある村に遣わし、子ろばを連れてこさせた。それは旧約聖書ゼカリヤ書9章9節のみことばが成就したことを示している。イエス様がろばに乗ってエルサレムに入られる時、大勢の群衆は「ダビデの子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」(9節)、と詩篇を歌い救い主を歓迎した。ところが世の権力者たちは、群衆がイエス様に従い賛美していることに対して危機感を募らせた。こうした中で対立の溝は深くなっていった。

1月20日 今日の通読箇所 マタイによる福音書21：12～22

「宮きよめ」

イエス様はエルサレムに入城された日、すぐに宮に行き、あたりを見回された後ベタニヤに宿泊されました。翌日宮においてになり、宮きよめをされました。宮で商売をしていた人々は、ささげものの鳩や動物を売りさばいていました。一般の人は礼拝のために自宅から動物を連れて来るのは大変でしたし、動物に少しでも傷があればささげられませんでした。ですから傷のないものをここで買ったのです。また献金のためには、各国の貨幣をイスラエル貨幣に両替する必要があり両替人がいました。柔和なイエス様が、人々を激しくみな追い出し、両替人の台や腰掛をくつがえされ旧約聖書を引用なさって「わたしの家は、祈りの家となえられるべきである」と、神様が求めていらっしゃる祈りと礼拝の心を教えてくださいました。

1月21日 今日の通読箇所 マタイによる福音書21：23～32

「何の権威によって」

イエス様は、人々の歓声のうちにエルサレムに入城され、翌日は両替人の台を激しくくつがえされ宮きよめをなさり、病の人々をおいやしになりました。宮で教えておられると、祭司長たちや民の長老たちが「何の権威によって、これらのことをするのですか」と問いただしました。しかし、彼らはイエス様がどなたであり、何の権威によってこれらをなさっているのか、わかりかけていたのです。それを知っておられたイエス様は「わたしも一つだけ尋ねよう」とバ

プテスマのヨハネの働きの権威はどこからであったか質問しました。彼らは「もし天からだと言え、なぜ彼を信じなかったのか、とイエスは言うだろう」と、「わかりません」と答えました。彼らはヨハネもイエス様も神様の権威と導きのうちに語り働いていることを知りながら固く心を閉ざしたのです。それに比べ取税人たちは素直にヨハネの言葉を受け入れ、罪を悔い改めイエス様を信じたのです。

1月22日 今日に通読箇所 マタイによる福音書21：33～46

「隅のかしら石」

この譬において、ぶどう園はイスラエル民族、農園主は神様、農夫たちはユダヤ人の宗教指導者たち、主人が遣わしたしもべは、預言者たちを指している。神様は、指導者たちを信頼し民を委ねたが、彼らはその信頼を裏切って預言者たちを迫害し、神の子を殺してしまう。イエス様は、彼らがしていることの恐ろしい罪を暗示し、彼らに悔い改めを迫られている。イエス様はこの譬の後に、詩篇118篇22,23節の御言葉を引用し、自分がユダヤ人に見捨てられる事を語っている。ユダヤでは石で家を造るが、その時に、役に立たない石は投げ捨てられる。ところが役に立たない石が、建物の四隅のかしら石となったのである。これはイエス様の十字架の死が、神の国という霊の家を建てる最も重要な基礎となったと言う意味がある事を教えている。

1月23日 今日に通読箇所 マタイによる福音書22：1～14

「王子の結婚披露宴」

この譬は、21章のぶどう園の悪い農夫たちの譬とよく似ている。イエス様は宗教指導者たちとの論争が始まる前に、この譬をもって、神様に招かれる者は多いが、選ばれる者は少ないと教えている。神様は、王子の披露宴に全ての人を招いている王のように、その民を神の国に招いておられる。しかし招かれた彼らは、様々な理由でこの招きを拒否している。そこで町の大通りに出て行って出会う人を誰でも招き、披露宴に出る礼服までも、王の方で用意している。しかし、そうした心遣いも無視して、礼服を身に着けない人がいた。王はその人を外に放り出してしまった。だから私たちも、十字架によって用意された救いの衣をしっかりと身に着けているべきである。

1月24日 今日に通読箇所 マタイによる福音書22：15～22

「神のものは神に」

パリサイ人たちは、イエス様をわなにかけようと彼らの弟子たちと、ヘロデ党

の人々を遣わしました。ヘロデ党は、ローマ皇帝カイザルに忠誠を尽くしてヘロデ家を盛り返したいという人々で、イエス様が税金を納めなくてよいと答えるに違いないから、そのときは激しい反撃に出るつもりでした。そのように納税拒否の答えなら、ヘロデ党をはじめ権力階級から反逆罪に問われ、納めなさい、と答えればユダヤ愛国者や一般民衆が敵視したでしょう。イエス様は貨幣を見させて「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」(21節)とお答えになりました。ペテロ第一2章13節に「すべて人の立てた制度に、主のゆえに従いなさい」とあり、上に立つ権威は摂理の中に神によっていると、パウロも「彼らすべてに対して、義務を果たしなさい。すなわち 税を納むべき者には税を納め 」(ローマ13章7節)と教えています。同様に、神様を信じているか、いないかにかかわらず、すべての人は神様の恵みによって生かされているのですから、神様への感謝と従順をもって生きるべきなのです。

1月25日 今日の通読箇所 マタイによる福音書22：23～33
「神の力」

サドカイ人は、復活を否定し、モーセの律法のみを信じていました。また政治的な立場の人々が多く、最高議会であるサンヘドリンの大半をしめていました。ここで彼らはイエス様に、申命記5章のみ言葉を引用して質問しました。イエス様は「あなたがたは聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている」と彼らの不信仰を指摘なさいました。神の力を知らないのは、聖書を知らないからだ。聖書を通してのみ、神様について、神様の御力、偉大さについて知ることができる、と教えてくださいました。復活についてパウロはコリント人への第一の手紙15章で「しかし、ある人は言うだろう。『どんなふうにして死人がよみがえるのか。』 おろかな人である。 肉のからだがあるのだから、霊のからだもあるわけである」と教えています。

1月26日 今日の通読箇所 マタイによる福音書22：34～46
「いちばん大切な戒め」

ユダヤ人たちにとって、律法の中でいちばん大切な戒めはどれか、という問題はいつも論争の的であった。ユダヤの古書「タルムード」に「モーセの律法には『何何するなかれ』という戒めが365、『何何すべし』というのが248、合計で613」とあるという。一人の律法学者が、イエス様のところに来て「先生、律法の中でどのいましめがいちばん大切なのですか」と尋ねた。するとイエス様は答えて、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこ

れと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』と仰せられた。つまり神様を愛する事と、人を愛する事は、二つのようで実は一つなのである。

1月27日 今日に通読箇所 マタイによる福音書23：1～12

「律法学者とパリサイ人の偽善」

律法学者やパリサイ人たちが、イエス様との論戦に敗れ去ると、イエス様は群衆や弟子たちに対して、律法学者やパリサイ人たちの偽善を指摘し、彼らにならわれないように諭した。彼らはモーセの律法を説いているので、彼らの言うことには従っても、言っていることはならうなと教えた。生命のない宗教には、いつでも形式的な事柄が優先されるものだ。彼らが「経札を幅広くつくり、その衣のふさを大きくし、また、宴会の上座、会堂の上席を好み、広場であいさつされることや、人々から先生と呼ばれることを好んでいる」(5～7節)とはその実例だ。イエス様も、「人を生かすものは霊であって中略。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」(ヨハネ6：63)と言っておられる。

1月28日 今日に通読箇所 マタイによる福音書23：13～22

「本末転倒」

イエス様は群衆と弟子たちにお話なさった後、今度は「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ」と彼らに直接語っていらっしゃいます。まず彼らの教えの誤りについて指摘なさいました。彼らは人々に、天国に入るために必要な正しい知識を与えないばかりか、かえって、誤った教えを教えていたからです。次に彼らの本末転倒の教えを指摘なさいました。救いか滅びかという重大な選択をしなければならぬ人々に、枝葉末節の教えを守らなければ神の祝福を受けられないと教えるのは混迷に導き入れることです。イエス様は神殿や祭壇より神様ご自身を尊ばれました。神様を抜きにして神殿も祭壇も供え物も中心的なものではないからです。

1月29日 今日に通読箇所 マタイによる福音書23：23～39

「白い墓」

本末転倒の一例は、はっか、いのんど、クミンです。これは料理や薬に用いられました。モーセの命令以外の草木にいたるまで、十分の一のささげ物の教えを当てはめながら、神様への忠実、愛やあわれみについては忘れていたのです。大切な小さなこともあります。救いか滅びかという根本的な分かれ道に立たされている人々に対して、もっと重要な教えを与え導くことが大切なのです。

そして、パリサイ人の偽善を指摘しておられます。ユダヤでは死人の墓は汚れたものですから過越し祭りが近づくと、巡礼者がまちがって墓に触れ汚れを受けないように、エルサレム周辺の墓を白く塗って目立たせたのです。イエス様は内側、すなわち心が清くなればおのずと外側の行いも清くなると教えておられます。

1月30日 今日に通読箇所 マタイによる福音書24：1～14

「終りのしるし」

イエス様の弟子たちは、神殿の素晴らしさに目を奪われていました。その時、イエス様は弟子たちに、世の終りが来ることとそのしるしを語られたのです。ここに記されているのは、直接的には紀元70年のエルサレムの滅亡の姿ですが、それは同時に、世界の終りが来る時の予表なのです。世の終りとそのしるしについて尋ねた弟子たちに対してイエス様は、偽キリストの出現、戦争と不安、民族的対立、飢饉と地震などを語られました。それらは現在、世界的な現象であり、多くの人々が世界の終りを感じているのです。クリスチャンも迫害を受け、そのために「多くの人がつまずき、互に裏切り、憎み合う」と記してあります。だからイエス様はあわてることなく、「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」と教えられたのです。

1月31日 今日に通読箇所 マタイによる福音書24：15～31

「終末と再臨」

イエス様は、エルサレム包囲を中心とする大患難の日に、どのようにしたらよいかを語られた。すなわち、エルサレム滅亡の時が到来すれば「荒らす憎むべき者」であるローマ軍の旗が、神殿の上にひるがえる。その時は、ぐずぐずせずに「ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。...中略...畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな」(17, 18節)等の警告をされた。後日、多くのクリスチャンがこのみことばを思い起こし、助かったということである。世の終りも同様であるから、このみことばをしっかりと記憶しておきたいものである。また世界の終りにはイエス様が「力と大いなる栄光とをもって」再臨される。だから、私たちはイエス様がいつ来られてもよいように、常に備えておくことが大切である。